

# ティーンエイジャーにとって「友達」とは

## ——ドイツの寮付き学校の調査から——

K.-Ulrike NENNSTIEL

中 田 知 生

# ティーンエイジャーにとって「友達」とは

——ドイツの寮付き学校の調査から——

K.-Ulrike NENNSTIEL

中 田 知 生

## 目 次

- 1 概要
- 2 方法
- 3 Das “Evangelische Seminar Maulbronn”
- 4 転校の決定 — 動機と主体 —
- 5 転校の評価
- 6 『友達』とは
- 7 友達関係
- 8 考察

## 1 概要

私達は社会で生きている限り、周りの人が何を考えており、私達の外面・態度等についてどう判断するかを、完全に無視することはできない。しかし、この「周りの目」を気にする傾向は、身体的、知的、精神的な変化によって非常に不安定になる思春期の年齢の人に特に強い。同時にこの年齢において、若者が物事を判断する時には、親などの大人よりも同年代の人々をレファレンスグループと見なし、彼女ら・彼らの意見や表情に大きく注目を払うようになる。(Hurrelmann 2007: 13-47, 157-193)

Robert Havighurst は、「一人前」の大人になるまでの成長を把握するために、1940年代の米国の若者をモデルに、“Developmental Tasks and Education”(1948)で『発達課題』を軸にした理論を展開した。約60年を経てこ

のコンセプトは、様々な修正や批判を受けたにもかかわらず、未だに欧米の、若者の成長に関する理論に極めて大きな影響を与えている。(Göppel 2005: 71)<sup>1</sup> 例えばドイツのティーンエイジャーについて中心に研究を進めている Dreher/ Dreher (1985) 及び Fend (2000) は、Havighurst と類似した形で4つの領域における「発展課題」を基本的なコンセプトとして維持している。①身体的な変化を受入れ・認めて、経済的に独立した大人の生活に向かって頑張る。②社会的関係の領域において親との関係の代わりに同年代の人々との関係をより重視し、社会的なスキルをうまく身につける。③性的領域を含めて自己アイデンティティの展開と親密なパートナー関係を結ぶ能力を身につける。④知識を得たり、自分なりの倫理的及び政治的価値観を育てたりする。(Göppel 2005: 71-83)

こういった背景の上で今回は、②で述べた課題とそれに対応する変化を中心に研究を進めた。寮付き学校を調査の対象とすることによって、親から離れて同年代の人々と一緒に生活している生徒が社会的スキルを、親元から平日のみ学校に通う生徒よりも早く取得することが想像できる。しかし他方、親から離れて寮付き学校で同年代の人々と一緒に暮らすことを選ぶ人は、この「発展課題」に関して成長が既に進んでいる人だと言えるだろうか？

キーワード：友達関係、友達、ドイツ、寮付き学校、量的調査

ここでは、寮付き生活に入る決定の主体が、当事者かその親だったか、又は、それ以外の、どういう（関係の）人が決定に影響を与えたのか、重要なポイントとなる。

転校の決定とその後の生活との関連について Grundmann (2004) が描いた、コンフォーミズム（大勢順応）対自律性・自主性及び共同体対個体というコンセプトは興味深い。転校の決定は、ギムナジウム<sup>2</sup>に入った生徒にとって、「当たり前」のように見える道から離れるという意味で「自律性」の表現である。他方、この決定の結果、毎日24時間少人数の同級生と一緒に生活を行う中で、コンフォーミズムへの圧力が強くなることも想像できる。実際に、寮付き学校の生活の中でこの矛盾はどのような風に現れるだろうか？

寮付き学校では、同級生と他の学年の生徒との関係で、ピアグループは必然的に重要な位置を示す様になる。しかし、同級生全員を『友達』と見なす人もいれば、区別を付ける生徒もいる。つまり、「ピア」、「クリック」（仲間集団）、「友達・友人」との間に区別を付ける人もいる。人によって、最も親しい友人、或いは自分が属するクリックは、親元の近くに住む「外部」の人であるので、ピア関係の図はさらに複雑になる。当事者の定義に従って各々の関係を検討し、ある程度総合的な図を描くのが、本研究の目的である。本論文はその研究の一部として『友達』関係を転校によって受けた変化を通して検討する。

## 2 方法

著者は、若者のピアグループを具体的に調べるために、ドイツの寮付き学校で生活している著者を対象に量的調査を行った。授業時間の30分程度を借りて、調査の内容、目的及び倫理的な扱いについて説明したり、質問に答えたりした後、すぐその場でアンケートに回答してもらった。回収の後の残った時間は、

日本に関して生徒の質疑に答える時間となった。

アンケート項目は、ドイツの大学の教育学部に属する、同じ研究グループのメンバーであるライナートレプト教授と共同で作成し、プリテストの回答を調査対象以外の学校の生徒に依頼した。調査期間は、2010年11と12月で、アンケートの分析はSPSSを使用に行われている。

調査の内容は、「入学・学校」、「友達関係」、いわゆる「クリック」、及び「家族に関して」という、4つの部分に分けられている。最初の項目群は、『転校』という、本人にとって一生に影響を及ぼす可能性の高いほど重要な決定に、本人、親、友達等がどの程度影響を与えたかを検討するためである。2番目の項目群は、『友達』の定義や友達関係についてである。次に、多かれ少なかれ個人的なつながりの強い『友達関係』と異なって、『集団』として動く、集団内外に影響力が非常に強い場合のある『クリック』、その活動、構造等について聞く。『家族』に関する項目は、本人が育った社会的背景を明らかにするためである。最後は、『5』として自由記述を付けくわえてある。

調査対象となったのは、主に9年生<sup>3</sup>と10年生で、計44名である。年齢は、調査の時点で13歳から17歳までと幅広い。その理由は、ドイツの学校制度で成績が良くなく、授業について行くのが難しそうな子供が同じ学年を繰り返す必要がある一方、成績が特に良くて優れた勉強能力を持っている子が学年を飛び越えることもあるからである。更に、進学のために転校する時点にも差異がある。最も一般的な公的進学校に行く場合、基礎の学校に4年間通う子もいれば既に5年間通う子もいる。それに対応して、9年の学年から始まる調査対象の学校の場合、入学以前に他の学校に通う年数に差が出る。

子供達が自分の家から学校に通う代わりに

他の生徒と一緒に学校の寮で住む時、親の影響は普通小さくなるのが当然と思われる。しかし、今回の調査でも明らかになったのだが、この推測は必ずしも正しいとは限らない。すなわち、親が日常生活の中で細かいところまで子供を見られないので、子供に対して何も言えないことがあるのは確かだが、重要なことに関しては、離れているからこそ親の意見が大事にされるケースが少なくない。また、今回調査対象となった学校の具体的な例で言うと、そこでは隔週末に自分の家（又は親戚などの家）に帰ることが条件となっているので、若者には親と無縁に暮らすという様な感じが生じない。更に、比較的多くの生徒の家は学校の約50キロ範囲内に位置しているので、必要な時には、いつでも短時間家族の人と会えるという状況もある。

しかし、それを考慮しても、寮付き学校では、同年代の人の影響が家から通う学校の場合より大きくなり、友達関係は「寮内」と「寮外」の友達と区別されて、密接な日常生活の中で友達関係の良さも辛さもよりはっきりと見えてくることは間違いない。そのために寮付き学校は若者の友達関係を研究するには、調査結果の普遍性が制限されていても、最も良い場所だと言える。

本論文では、前半で、転校の決定と評価を友達の位置づけと言う視野から検討し、後半で、在学生の友達関係に焦点を与える。

### 3 Das "Evangelische Seminar Maulbronn"

今回の調査に協力してくれた学校は、小さな田舎町の修道院に位置している。この修道院は、「国際連合教育科学文化機関」(UNESCO)によって「世界文化遺産」に指定されている。しかし同時に、この修道院におかれている学校の建物・部屋に初めて入る人は「ハリーポッターを思い出す」と言うのが

珍しくない。この意味で修道院学校の雰囲気は若者に魅力的である。<sup>4</sup>

この“Seminar”は、公的でありながら、州のプロテスタント教会の学校でもある。そのために学校に入るには、プロテスタント教会に属する（又は、メンバーになることが決定されている）ことが前提条件となっている。この条件を満たすギムナジウム<sup>5</sup>在籍の8年生が3～4日間かかる入学試験を受けられる。寮付き学校なのでお金がかかるが、生徒のほぼ全員が少なくとも一部の負担を奨学金でカバーできる。(Wikipedia 2011:4を参考)。だから、経済的な理由で入学を諦めることはない。(校長へのインタビューより)。

調査の中では、『あなたの家族の収入は、生活に足りていますか?』という質問に対して、『1 問題なく足りています』から『5 非常に厳しい』まで5段階のスケールで生徒の6割が1又は2に丸を付けた。逆に5又は4に丸を付けた人は合わせて14%となっている。生徒の親の7割が自分の所有である家で住んでおり、4分の3は、人口の3万人以下の小さな市町村で、親の教育水準は平均よりもかなり高いということが目立つ。しかし、父親が高等教育を全く受けていない16%の家庭を含めて、教育・知識に関する考え方を図る指標としてドイツの代表的な調査「Shell Jugendstudie」(Shell Deutschland Holding 2010)で使われている親の家にある本の数に関する質問に対しては、1（『少ない』）から5（『とても多い』）までのスケールで生徒全員が4、又は5に丸を付けた。

### 4 転校の決定 — 動機と主体 —

この様な家族や社会的環境で育ったティーンエイジャーは、どんな決定過程を経て教会の寮付き学校へ転校することになるのだろうか？

まず、当事者の動機を聞いてみると、『新

しいことを経験したかった』及び『この学校の紹介文が面白そうだった』と言う人がいずれも 7 割以上いて、一般的な好奇心と同時に、具体的にこの学校についての関心が表されている。これを背景に、因子分析の結果として『新経験』、『寮付き学校』と新しい『友達』に特に注意したグループを区別できる(表 1)。

表 1 転校の動機

選択項目	因子		
	新経験	寮付き学校	友達
新しいことを経験したかった	.757	-.030	-.164
この学校はおもしろそうだった	.636	.431	-.022
より積極的な援助を受けたかった	.377	.386	.071
新しい友達が欲しかった	.036	.147	.698
以前に行った学校が好きではなかった	-.068	-.048	.234
寮付きの学校に行きたかった	.429	.627	.449
この学校についてたくさん聞いたことがあった	.017	.644	-.058

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a 7 回の反復で回転が収束しました。

新しい学校についての情報をどこから得たかと言うと、親、兄姉、祖父母、又は、直接にこの学校及びパンフレットからということが多い。それ以外には、特に神父が大きな役割を演じた様である。それに対応して、宗教に対する関心のためにこの学校を魅力的に感じた人もいる。全体的に知識欲が強い生徒が多い。しかし、思春期の後半の年齢に依じて、多くの生徒が特に注目を払うのは、友達関係である。入学の動機として『新しい友達が欲しかった』と言う人が 3 分の 2 である。実際にこの学校で生活する生徒の間で最も評価が高いのは『友達関係』であることを見ると、この動機と入学後の条件とはうまく合っていると言える。

転校の決定について聞くと、それは「自分自身のみ」の決定だったと答える人が 78% に至る(表 2)。しかし同時に、5 割以上の生徒が親の影響が大きかったことを認めている。

親以外に転校の決定に影響を与えた人は確かに少ないと思われる。親の次は兄弟姉妹の 17% となっており、祖父母等の親戚が決定に関係があることもある。しかし、比較的大きな影響を与えるだろうと予想されていた友達や親友は実際には転校の決定に余り関わりがない様に見える。これは、当事者の年齢(13・14 歳)がまだ比較的若いということと転校の重要性ということと深い関係があると思われる。特に、知識人が多くて社会的地位が高い家庭では、子供の人生に関わるほど大きな意義を持つ決定には、この年齢の子供の親が子供が友達の声を聞くのは余り許さないためであろう。生徒が以前に通っていた学校の先生の影響もほとんど見られないが、教会と楽器等の先生の助言が決定に多少反映されていることは社会的な環境(ミリュー)の特徴と解釈できる。

他方、上の回答を因子分析で整理すると、1『家族』、2『友達』、3『先生』という形ではっきりと区別される(表 3)。

表 2 決定の主体

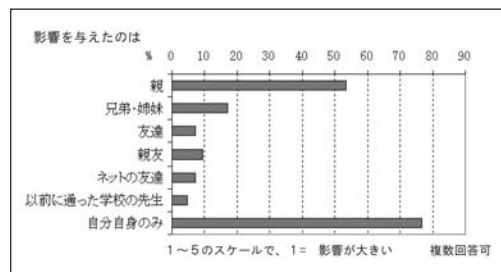


表 3 転校決定の主体の因子分析

影響を与えたのは	因子		
	家族	友達	先生
親	.736	.179	-.016
兄弟・姉妹	.752	.255	.139
友達	.232	.855	.011
親友	.192	.851	-.003
ネットの友達	.493	-.373	.505
以前に通った学校の先生	-.130	.086	.906
自分自身のみ	-.716	-.129	.188

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a 5 回の反復で回転が収束しました。

## 5 転校の評価

転校の前後の学校の評価はともかくとして当事者の生活についての評価は、友達関係を把握するために有益である。

以前通っていた学校に行き続けても良かったか、通い続けなくて良かったと思うか、と言う質問に対して、『通い続けても良かった』と答える生徒は4割ほどいるが、逆の見方をする生徒の方が多い。

以前の学校でも良かったと言う主な理由は、親友と友人との友達関係である。兄弟姉妹が近くにいたことも良かったと言う人が約半分であり、その割合が「親のため」に良かったと言う割合を上回っている(表4)。以前の学校の先生、成績評価、校則等、学校に係る要素に関しては、現在の学校に対する評価の方が高い生徒が圧倒的に多い。むしろ、前に通った学校に行き続けなくて良かったと喜んでいる人の場合、ある先生、ある同級生、又

はその学校での校則のため、転校ができて良かったと思う傾向が見られる(表5)。

『通い続けても良かった』と『通い続けなくて良かった』という、いずれの立場の場合でも、その判断基準について因子分析により4つのグループを区別できる(表6、表7)。「家族」と「友達」関係は、いずれの立場の場合も、重要な因子となっている。学校については、校則と成績は、学校の先生とは明らかに異なるカテゴリーに属すると見なされている。

表6 「以前の学校でも良かった」と言う判断基準

	因子			
	家族	校則	友達	個人
友達のため	-,002	,071	,896	,106
校則のため	,142	,919	,069	,192
校則の扱いのため	,127	,920	,084	,073
成績のため	-,111	,589	,458	,215
ある先生のため	,113	,255	-,006	,941
クラスメートのため	,021	,137	,902	-,135
親のため	,858	,139	,066	,263
兄弟・姉妹のため	,867	-,145	-,086	-,203
家から通うことができたから	,825	,243	,012	,120

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

a 5回の反復で回転が収束しました。

表4 以前の学校でも良かった理由

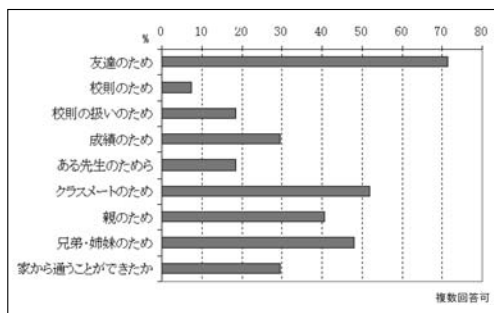
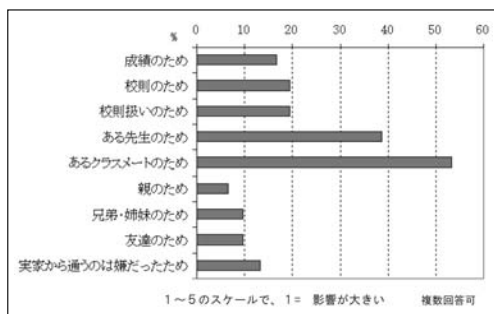


表5 転校できて良かった理由



より具体的に見ると、『通い続けても良かった』と言う生徒で第1因子の人には、以前と異なり、家族と一緒に生活できなくなったのが、多かれ少なかれ『損』と感じて、特に、転校してからまだ3カ月もたっていない9年生の間『ホームシック』になっている人も含まれていると考えられる。

第2因子のグループは、以前の学校の校則とその扱いは、今の学校の場合よりも自分に合っていたと表現しているが、ここでは成績も一緒になっているという点に注意すべきである。つまり、Seminar Maulbronnにおいて従来の教育目的は、親の経済的条件と無関係に関心と発育可能な能力を持つプロテスタント教会の信者に高いレベルの知識や理性を身につける機会を与えることであるので、生

徒の自発的勉強に対する期待が高い分成績評価が厳しいと思われる。すると、成績が落ちた生徒は、この観点から見て以前の学校の方が良くて、楽だったということになる。校則については、ある程度大きく、生徒の多様性が多い公立のギムナジウムでは、各々の先生が自分が担当する科目を中心に生徒と接したり、校則をある程度緩やかに扱ったりする傾向があるのに対して、寮付きの、教会の制度の下に置かれている学校では、教員が生徒に対して包括的な責任者の役割を演じなければいけない。

第3因子、「友達重視」の生徒には、人数によって選択がより広い以前の学校に特に親しい友達がいて、転校のために彼女達・彼らと日常生活の中で会えなくなった、小さな市町村出身の生徒が多いことを考慮すれば、小さい時から付き合っ一緒に同じ学校に行っていた友達が含まれていることは想像しやすい。実際に、この「友達注視」のグループは学年が高い（＝寮に入ってから期間が長い）ほど弱くなる。

第4因子になると、人数と項目数の関係で解釈しにくいところではあるが、このグループの場合、以前の学校での教え方などが特に気に入った、又は個人的に特に好きだった先生がいた、などが強い印象を残した様である。

表7 転校ができて良かったと言う判断基準

	因子			
	家族	学校	友達等	統制
成績のため	,344	,578	-,335	,392
校則のため	-,090	,875	-,024	,097
校則の扱いのため	-,159	,795	,057	-,125
ある先生のため	,208	,318	,328	,709
クラスメートのため	-,385	-,037	,782	,183
親のため	,858	-,078	,063	,288
兄弟・姉妹のため	,910	-,105	-,154	,031
友達のため	,125	-,015	,868	-,115
実家から通うのは嫌だったため	,101	-,134	-,147	,890

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

a. 6回の反復で回転が収束しました。

次に、以前に通った学校には行き続ける必要がなくて良かったと言う理由を見ておこう（表7）。

ここは、上の場合と同じく家族、友達、学校の校則と先生のこと、それぞれの因子に分かれている。上と異なる構成の因子に属するのは、『実家から通う』ことの項目のみである。第1「家族」、第2「校則・成績」、第3「友達」、第4「先生」という順も同様である。しかし方向は、今度は正反対であるためいくつかの注意が必要である。

家族については問題がないが、「校則・成績」になると、以前に通った学校では緩やか過ぎると考えるか、又は反対に、様々なルールが不必要な「統制」と感じられていたか、データから読み取ることは不可能である。だが、Seminar Maulbronnにおいて、生徒に認めにくいルールについて常に議論する機会があるのは、より適切な扱い方で自分に合っていると感じる生徒がいるのは、「自由記入」の記述によって分かる。他方、よりしっかりとしたルールが欲しくて転校し、今の学校で満足度が上がった生徒もいる。成績に関しても同様に、Seminarでは自分の能力や努力を適切に評価してくれたり、多くの知的刺激を与えてくれたりしているので、勉強が一層楽しくなったと言う人もいれば、Seminarで勉強が楽しくなったから、又は、少人数で頑張らざるを得ないから成績が上がったと言う生徒もいる。

第3因子は「友達・クラスメート」だが、こういう人達のために以前の学校に行かなくて良いのはありがたい、と感じるならば、この「友達」との関係は、ない方が良い様な関係だったという意味に他にならない。この因子グループに属する生徒は、個人的に以前の学校でいじめの対象となっていたか、又は、学校・部活などの制度の違いのためにより自由に「友達」を選べるはずのドイツでも、土井隆義が日本の中学生や高校生について描い

ている『友だち地獄』（土井2008）が存在するためかは、更に調査する必要がある。

第4因子で「ある先生」と「実家から通う」という項目は一緒になっている。そこで、「ある先生も嫌だったし、通うことは面倒だから、それも嫌だった」という様な軽い感じの、偶然一緒になった様な背景があることもあり得るが、より深い意味で、どちらも大人の統制の一部と感じた生徒の表現であることもあり得る。後者が当てはまるならば、それは、Seminarにおいて生徒が少人数で教員に責任者の目で包括的に見られ、コントロールされているにもかかわらず、より自由だということを意味する。

## 6 『友達』とは

ドイツの若者が「友達」と呼ぶ人は、どういう人なのかを可能な限り幅広く把握するために、調査側の方から定義することはしなかった。むしろ、「友達と呼んでいる人は何人か」、「『友達関係』とは、あなたにとって何を意味するか」、又は「友達が援助してくれるのは、どういう時か」といった質問の答えから『友達』と言うイメージを読み出すことにした。

まず、『友達』と呼んでいる人の人数だが、図1で見える通り、8人～14人が最も多いが、26人～40人と言う人も17%を示している。

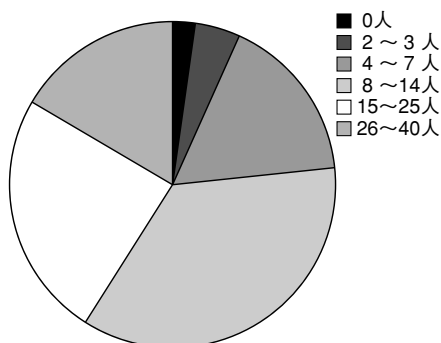
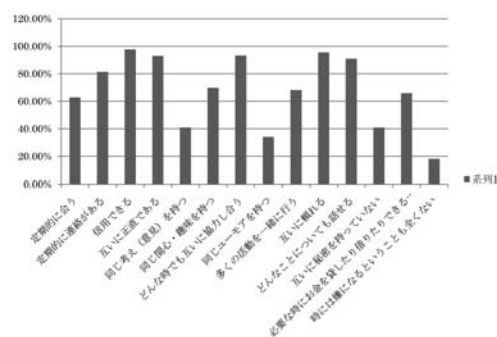


図1：『友達』と呼ぶ人の人数

『友達』と呼ぶ人が4人より少ないのは、例外的と見られ、「寂しい」というイメージと結びついているかの様である。他方、『友達』が26名以上の場合、『友達』と名付けられている人はクラス全員に更に実家の地元にいる「昔」の友達を加えた合計だと思われる。

「『友達関係』とは、あなたにとって何を意味するか」と言う質問に対して、16種の選択肢から選ばれた回答（複数可）が表8にまとめてある。<sup>6</sup> そこで明らかになる通り『信用できる』、『互いに正直である』、『どんな時でも互いに協力し合う』、『互いに頼れる』及び『どんなことについても話せる』という項目を、ほぼ全員が『友達関係』の特徴と見なしている。『定期的に連絡がある』ことも八割の生徒が重要に思っているが、それ以外の項目については、データは考えのバラつきを示している。そのうえ、上に（表7の因子分析結果の関連で）述べたことを背景に『時には嫌になるということも全くない』という意見に賛成する人が2割以下で極めて少ないという点が上述した意味で非常に興味深いところである。

表8 「友達」とは、意味するもの



因子分析を行うと、第1因子の項目は信頼を表す項目であり、(右に述べた) 9割以上の回答者が重要に思う項目と殆ど一致している(表9)。

第2因子として、『同じ考え(意見)を持つ』こと、『同じユーモアを持つ』こと、『同



表9 『友達』という意味

要素	信頼性	共通性	日常性
定期的に会う	.023	.075	.839
定期的に連絡がある	.250	-.023	.755
信頼できる	.752	.128	.446
互いに正直である	.734	.299	.094
同じ考え（意見）を持つ	.190	.701	-.132
同じ関心・趣味を持つ	.160	.596	.269
どんな時でも互いに協力し合う	.768	.276	.141
同じユーモアを持つ	-.002	.717	.078
多くの活動を一緒に行う	.390	.435	.281
互いに頼れる	.751	.058	.074
どんなことについても話せる	.669	.095	.079
互いに秘密を持っていない	.595	.242	-.230
必要ならお金を貸したり借りたりする（一月分の小遣いぐらい）	.184	.248	-.241
嫌になることがない	.131	.472	-.140
以心伝心が可能	.414	.542	.169
多くの時間を一緒に過ごす	.240	.416	.392

表10 「信頼型」友達関係の家族的背景

		信頼型
年齢	Pearson の相関係数	.080
	有意確率（両側）	.617
	N	41
女性	Pearson の相関係数	.211
	有意確率（両側）	.186
	N	41
兄・姉の人数	Pearson の相関係数	.303
	有意確率（両側）	.054
	N	41
妹・弟の人数	Pearson の相関係数	.081
	有意確率（両側）	.619
	N	40
実家の市町村の規模	Pearson の相関係数	-.029
	有意確率（両側）	.861
	N	40
父の教育水準	Pearson の相関係数	.083
	有意確率（両側）	.607
	N	41
母の教育水準	Pearson の相関係数	.139
	有意確率（両側）	.387
	N	41
実家の本数	Pearson の相関係数	.066
	有意確率（両側）	.682
	N	41
収入の充分さ	Pearson の相関係数	-.034
	有意確率（両側）	.833
	N	41
信頼	Pearson の相関係数	1
	有意確率（両側）	
	N	42

相関係数

\*\*相関係数は1%水準で有意（両側）です。

じ関心・趣味を持つ』こと、『以心伝心が可能』であること、『時には嫌になるということも全くない』、『多くの時間を一緒に過ごす』という項目で、「類似性」、「共通性」が強調されている。

第3因子で『定期的に会う』、『定期的に連絡がある』、『信頼できる』と『多くの時間を一緒に過ごす』のは、有意の差を示している。このグループでは、「日常的な接触」とそれに基づいた信頼が「友達」をつなぐ要因となっている。

これらのグループの特徴を様々な観点から把握するために『友達』と呼ぶ人の人数、『家族の属性』等と合わせたりその相関係数を検討したりする必要がある。

まず、『信頼』を最も注視する生徒の間では、兄姉のいる人、そして女性が比較的に多い。（表10）前者の関係については<sup>7</sup>、兄姉がいるゆえに同世代の人との関係において安心・信頼できることを経験してきたから、自分が選択できる友達の関係においても、安心できる信頼性を求めていると考えられる。後者、つまり「信頼型」に女性が多いのは、親密なこと、人間関係の問題等を話題にすることに小さい時から慣れさせられているために、相手を信頼できることが非常に重要なことになる（Bütow 2006, 伊藤2003, 藤田2005, 古久保2003, 中村2003, 伊藤1998）。「信頼型」の友達関係を求める生徒に、友達の数が比較的少ないのは、同じく、親密なことについて話し合う等の背景のもとで分かりやすい。

友達関係で『共通性』を特に注視するグループには、寮外の友達との連絡が少ないという傾向が見られる。

連絡手段として主にネット（チャット、メール等）が使用されている（表11）。しかし、同じくネットを連絡手段としてよく使う、『信頼』を友達関係の根拠と見なしている生徒と異なって、電話の利用は余り見られない。

『日常性』を注視するグループの場合、携帯

表11 「友達」のイメージと連絡方法の相関係数

		信頼性	共通性	日常性
直接に会う	Pearson の相関係数	-.111	-.263	-.178
	有意確率(両側)	.488	.096	.266
	N	41	41	41
電話で話す	Pearson の相関係数	.333 <sup>(*)</sup>	.157	.112
	有意確率(両側)	.031	.321	.479
	N	42	42	42
携帯メール(SMS)	Pearson の相関係数	.135	.124	.229
	有意確率(両側)	.393	.433	.145
	N	42	42	42
コンピューター・メール	Pearson の相関係数	.278	.114	.072
	有意確率(両側)	.075	.473	.651
	N	42	42	42
ネット(ミクシ等)	Pearson の相関係数	.335 <sup>(*)</sup>	.471 <sup>(**)</sup>	.137
	有意確率(両側)	.030	.002	.386
	N	42	42	42
手紙を送る	Pearson の相関係数	-.030	.193	.163
	有意確率(両側)	.852	.227	.309
	N	41	41	41

\* 相関係数は 1 %水準で有意(両側)です。

\* 相関係数は 5 %水準で有意(両側)です。

のメール(SMS)は、直接に一緒にいない時に最も大切な連絡方法となっている。

「共通型」の友達関係のグループには、家族的属性などに関して余り優位の差が見られないが、「日常性」を注意するグループには、兄姉が比較的多いということと家族の収入にはあまり余裕がないという傾向が見られる

(表12)。後者には、次の様な背景があると想像できる。経済的条件にあまり恵まれていない家族のために小さい時から嫌がらせやいじめを受けたり、周りの同年の人と違って自分にだけ友達がいないという様な経験を重ねたりしてきた人は他人に対して不信感や不安を持つようになる。場合によって、親のこういった不安が子供に伝わるということもある。いずれにせよ、その結果、他人と親しくなったり、友達になったりすることが非常にうれしいので、それを日常的な連携を通して常に再確認することを重要に感じる。小さい時から生まれた社会的な不安のために、このような背景の人には、特に異なる家族的背景の人のコンタクトにおいて安心したり相互の信頼

表12 「日常性」を注視するグループの属性

		日常性
年齢	Pearson の相関係数	-.115
	有意確率(両側)	.473
	N	41
女性	Pearson の相関係数	-.081
	有意確率(両側)	.613
	N	41
兄・姉の人数	Pearson の相関係数	.293
	有意確率(両側)	.063
	N	41
妹・弟の人数	Pearson の相関係数	.168
	有意確率(両側)	.301
	N	40
実家の市町村の規模	Pearson の相関係数	-.028
	有意確率(両側)	.862
	N	40
父の教育水準	Pearson の相関係数	-.004
	有意確率(両側)	.979
	N	41
母の教育水準	Pearson の相関係数	-.045
	有意確率(両側)	.780
	N	41
実家の本数	Pearson の相関係数	-.123
	有意確率(両側)	.442
	N	41
収入の充分さ	Pearson の相関係数	.382 <sup>(*)</sup>
	有意確率(両側)	.014
	N	41
日常性	Pearson の相関係数	1
	有意確率(両側)	
	N	42

\* 相関係数は 1 %水準で有意(両側)です。

\* 相関係数は 5 %水準で有意(両側)です。

関係を育てたりするのは非常に難しい(Hurrelmann et al 2007, Hradil 1999, Bourdieu 1982)。

兄姉が多いことと友達関係において「日常性」を注意することとが直接に関係があるのではなく、むしろ、左に述べた経済的条件を媒介にこの結果が生みだされたと思われる。

## 7 友達関係

ティーンエイジャーの友達関係を色々な視野から把握するために、『援助を受ける機会』、連絡の頻度と方法、友だちが嫌になる時の反応について質問した。

『どんな時に友達が援助をしてくれるか?』

という質問に対して、『悲しい時』、『相談が必要な時』、『何らかの援助が必要な時』という回答が最も多い。表13は因子分析の結果を示している。

第1因子の場合は、『病気の時』と言う項目以外に、全ての項目で『学校で問題がある時』、『宿題をやっていない時』、『してはいけないことをした時』の様に、多かれ少自分が『悪かった』、又は自分の責任でうまくいかなかったケースだと言える。従って、このグループにとって『友達』とは自分が失敗した時、恥ずかしくなった時、自分の責任で困ってしまった時でも自分を受入れて、援助してくれる人ということを意味する。

第2因子のグループは、第1因子と対照的に、「内面的な困難」に集中している。『悲しい時』、『寂しい時』、『相談（又は援助）が必要な時』という組み合わせは、「落ちこむ」傾向の要因をまとめている。

第3因子は、友達の援助を受ける機会の全体は、『何となく物事はうまくいかない時』という感じの表現と見なせる。選択の対象となった答えの中から『当てはまらない』のが最も多くなっているのは、『お金の問題がある時』という項目である。その理由は、恐ら

く今回のサンプルにあるだろう。「お金について話さない」という規範が社会層の高い人々の間で支配的であり、この「層」に属しないのに彼ら・彼女達と一緒に生活する人こそ上述した規範を絶対に守る様に頑張る。また、日常生活で要るものを買う必要があまり多くないし、1週間おきに実家に帰るので、その時に必要なものを買ってもらえるだろう。本当に足りないものがあってそれを買うお金もないことがあったら、（お金よりも）必要なものを貸してもらえることもあり得る。どうしてもお金が必要な場合、最終的な手段として、友達からではなく、学校の先生からお金を借りることになる可能性もあり得る。

友達からの援助に関する因子と、上の分析によって区別された「信頼型」、「共通型」と「日常型」の友達関係との相関係数を見ると（表14）、有意の差が出るのは、各々の援助と「信頼型」の友達関係の場合のみである。それによれば、友だちから援助を期待できるのは「信頼型」の友達関係を持つ人のみであり、しかも、この友達関係を持つ人がどんな時でもサポートをしてくれる。

表14 友達関係の類型と援助との関係

		信頼性	共通性	日常性
「自己責任」	Pearson の相関係数	.518(**)	.023	.059
	有意確率（両側）	.001	.887	.721
	N	39	39	39
「落ち込み」	Pearson の相関係数	.318(*)	.148	.182
	有意確率（両側）	.048	.367	.267
	N	39	39	39
「何となく」	Pearson の相関係数	.372(*)	.023	-.184
	有意確率（両側）	.020	.892	.261
	N	39	39	39

\*\*相関係数は1%水準で有意（両側）です。

\*相関係数は5%水準で有意（両側）です。

表13 友達の援助の機会

	因子		
	自己責任	落ち込み	何となく
病気のとき	.785	.149	-.300
悲しいとき	.363	.613	.165
学校で問題があるとき	.596	.154	.252
宿題をやっていない時	.560	.090	.175
恥ずかしいことがあった時	.540	.141	.616
先生と問題のあるとき	.787	.092	.193
クラスメートと問題がある時	.238	.281	.164
親と問題があるとき	.107	.057	.841
お金の問題があるとき	.538	.124	.224
してはいけないことをした時	.628	-.033	.325
どこかに逃げたいとき	.253	.145	.585
淋しいとき	.025	.841	.117
何らかの援助が必要なとき	.117	.946	.177
相談が必要な時	.016	.753	-.111

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a 4 回の反復で回転が収束しました。

最後に、特に表7で表れていたように、友達が嫌になる時があることを8割以上の生徒が経験することだという背景の上で、友達が嫌になっている時にどうするかを見て行く（表15）。

表15 友達に腹が立つ時

	??		
	外向き	内向き	気分転換
勉強に集中する	,598	,152	,375
時間がないと言う	,041	,070	-,392
一人でいたいと言う	-,052	,780	-,243
運動する	,095	-,131	,755
楽器を弾く	-,092	,244	,694
引きこもる	,057	,770	,162
学校外の友達と連絡とる	,475	-,294	-,108
できるだけ早く何日間出かける	,739	-,140	,140
親と相談する	,616	,108	-,297
誰にも分からない様に努力する	,605	,427	-,129

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

a 4 回の反復で回転が収束しました。

因子分析によって3種類の態度を区別できる。

第1は、気になるから外部に向かって、寮外の人と話す、又は勉強に集中する、という反応である。後者の場合、趣味的な活動と異なって気を紛らわすだけではなく、勉強が早く進めばその後外部に向かうための時間を作れるという意図が含まれているだろう。

第2因子は、寮の中では、他の理由を付けず共同の活動等を正直に断り、内面的に「でかける」という態度である。

第3の因子は、趣味的な活動を通して問題や違和感を吹き飛ばすことを意味する。

これらの因子を友達の類型型と合わせて相関係数を出すと、一点のみで有意な差が認められる。それは、『共通型』の友達関係と1因子で示されている反応である。その根拠となっているのは、恐らく次のことである。友達の『共通性』を特に注視することと、友達が（一時的に）嫌になるということは合わない。共通の気持がなくなると、友達関係の基盤が揺らぐので、非常に不安な状態が生まれる。この深刻な問題を解決するために、「第三者」の意見・相談を求めるのは最も合理的な反応であろう。この反応が不可能な場合、内面的に逃げ出して時間を作ること、又は、大事な、邪魔してはいけない勉強をしている

ので、周りの人に、これは友達と付き合うことのできない優先すべき行動として認められている。

## 8 考察

本論文では、ドイツのティーンエイジャーにとって、『友達』とは何を意味するかを検討した。具体的に、“Evangelisches Seminar Maulbronn”という寮付き学校の在學生へのアンケートによって、転校の決定とそれに従う変化を通して友達の位置づけを検討し、在校生にとって『友達』の意味を把握した。その結果は次のようにまとめられる。

1. 日本の中学性年齢のティーンエイジャーが寮付き学校へ転校するという決定に当たって、友達の影響は極めて小さい。これは決定の重要性和サンプルの社会的な背景とが深い関係があると思われるので、別なサンプルで、この年齢で友達がこれほど重要な決定に与える影響を更に検討する必要がある。

2. 転校する当事者の動機、又、転校に関する評価には、『友達』関係が非常に大きな役割を演じる。

3. 『友達』という定義によって、3つのグループを区別できた。第1、「信頼」できることを友達関係の前提とするグループ。第2、「共通」性さえ充分ならば、友達となるグループ。第3、「日常」的なことを中心に友達と付き合うグループ。

4. サンプルは、比較的小さくて社会的背景に偏りがあるので、各々のグループの特徴についてさらに検討する必要があるが、仮説的な意味では次の特徴を指摘できる。

① 「信頼型」の友達関係を求める人には、姉・兄がおり、友達数が比較的少ないが、どんな時でも援助を期待できる傾向が見られる。友達と連絡を取るために主にネットと電話を使用する。このグループには女性の方が多い。

② 「共通型」の友達関係の生徒には、ネッ

トを通して友達と連絡を取る傾向が強いが、外部の友達に連絡すること自体は少ない。友達が嫌になる時に、外部に向かって、第三者との話を求める傾向が見られるので、友達とのトラブルに対する抵抗力は弱いと思われる。

③ 「日常型」と名付けたグループには、友達と多く接することが、最も重視されている。友達と一緒にいない時に携帯メールで連絡をとることが多い。家族の生活が経済的に厳しいという傾向が見られる。この点については、サンプルサイズの関係で特に注意が必要だが、文献によってこの傾向の仮説が支持されている。

## 注

- 1 Havighurst の本は1958年に日本語に翻訳されたが、そのコンセプトに対する注目は、日本において極めて小さい。
- 2 脚注5を参考に。
- 3 ドイツの学校制度は日本と異なって学年は、1から（近年最後の隔年となっている）12まで続けて数える様になっている。
- 4 実際にそこで生活する生徒の9割以上が雰囲気、建物等が好きで高く評価している。
- 5 ギムナジウムとは、ドイツの教育制度の中で最も早く直接に大学入学のために必要な資格を得る学校で、5年生から8年間続く学校である。
- 6 この表の数字は『当てはまる』又は、『どちらかと言えば当てはまる』に○を付けた人の割合を示している。
- 7 全体のサンプルが小さいが、偶然の結果だけではないことを前提とする。

## 参考文献

- 土井隆義, 2008, 友だち地獄。「空気を読む」世代の差バイブル。筑摩書房, 東京。
- Bütow, Birgit, 2006, Mädchen in Cliques. Sozialräumliche Konstruktionsprozesse von Geschlecht in der weiblichen Adoleszenz. Weinheim und München: Juventa.
- Dreher, E./ Dreher, M., Entwicklungsaufgaben im Jugendalter: Bedeutsamkeit und Bewältigungskonzepte. In: Liepmann, D./ Stiksrud, A. (eds.): Entwicklungsaufgaben und Bewältigungsprobleme in der Adoleszenz. Göttingen, 56-70.
- Fend, H., 2000, Entwicklungspsychologie des Jugendalters. Ein Lehrbuch für pädagogische und soziale Berufe. Opladen: Leske & Budrich.
- 古久保さくら, 2003, 女の子が群れるということ — 少女たちの社会化; 天野正子・木村涼子「ジェンダーで学ぶ教育」, 東京: 世界思想社, 第9章, 153-167.
- 藤田由美子, 2005, 児童期におけるジェンダー形成と子供文化; 望月重信, 他「教育とジェンダー形成」, 東京: ハーベスト社, 第2章, 47-71.
- Göppel, Rolf, 2005, Das Jugendalter. Entwicklungsaufgaben – Entwicklungskrisen – Bewältigungsformen. Stuttgart: Kohlhammer.
- Grundmann, Matthias, 2004, Aspekte einer sozialisationstheoretischen Fundierung der Jugendforschung. In: Hoffmann, Dagmar, Merckens, Hans (eds.): Jugendsoziologische Sozialisationstheorie. Impulse für die Jugendforschung. Weinheim und München: Juventa; 17-34.
- Havighurst, Robert J., 1948, Developmental Tasks and Education. New York: David McKay.
- Hradil, Stefan, 1999<sup>7</sup>, Soziale Ungleichheit in Deutschland. Opladen: Leske und Budrich, UTB.
- Hurrelmann, Klaus, 2007<sup>9</sup>, Lebensphase Jugend. Eine Einführung in die sozialwissenschaftliche Jugendforschung. Weinheim und München: Juventa.
- Hurrelmann, Klaus et al., 2007, Kinder in Deutschland 2007. 1. World Vision Kinderstudie. Frankfurt: Fischer Taschenbuch Verlag.
- 伊藤公雄, 1998, 生まれる一つくられる『男』と『女』; 伊藤公雄・牟田和恵「ジェンダーで学ぶ社会学」, 東京: 世界思想社, 第1章, 16-29.
- 伊藤裕子, 2003, 『女』になる, 『男』になる。ジェンダーの発達心理学; 天野正子・木村涼子「ジェンダーで学ぶ教育」, 東京: 世界思想社, 第2章, 25-39.

中村 正, 2003, 男の子は暴力的なのか? ; 天野  
正子・木村涼子「ジェンダーで学ぶ教育」, 東  
京: 世界思想社, 第8章, 135-152.

Shell Deutschland Holding (ed.), 2010, 16.  
Shell Jugendstudie. Jugend 2010. Frankfurt  
/M.: Fischer Taschenbuch Verlag.

## 謝辞

調査に協力してくれた Evangelisches Semi-  
nar Maulbronn に感謝致します。

Herrn Ephorus Küenzlen und den Schül-  
erinnen und Schülern des Evangelischen  
Seminars Maulbronn danke ich herzlich  
für Ihre Kooperation.

[Abstract]

## Was bedeutet für Teenager “Freund(e)” ? Basierend auf einer Untersuchung in einem deutschen Internat

K.-Ulrike NENNSTIEL  
Tomoo NAKATA

Seit Mitte des letzten Jahrhunderts Havighurst seine Theorie der Entwicklungsaufgaben verfaßte, beeinflusst diese die wissenschaftliche Forschung über Jugend. Die Ablösung vom Elternhaus und der erfolgreiche Aufbau sozialer Beziehungen zu Gleichaltrigen gilt dabei nach wie vor als ein zentraler Bestandteil auf dem Weg des Erwachsenwerdens. Vor diesem Hintergrund widmet sich der vorliegende Beitrag der Frage, wie sich die Freundschaftsbeziehungen Jugendlicher gestalten, und welchen Einfluß Freunde und Freundinnen auf zentrale Entscheidungen ausüben.

Als empirische Grundlage dienen in diesem Beitrag die Daten aus einer Untersuchung, die mit freundlicher Unterstützung des Evangelischen Seminars Maulbronn unter den dortigen Schülern und Schülerinnen durchgeführt wurde. Als vorläufiges Ergebnis der Auswertung eines Teils der quantitativen Daten lassen sich nach ihrer zentralen Grundlage drei verschiedene Freundschaftstypen unterscheiden: vertrauensbasiert, auf Gemeinsamkeiten basiert und alltagsbasiert. Diese Typenbildung deckt sich mit ähnlichen Beschreibungen in der Fachliteratur, bedarf aber sowohl durch die Auswertung weiterer Daten aus dieser Studie als auch durch zusätzliche Datenerhebungen noch einer weiteren Untermauerung.